

「工業化社会により近代化を進め、効率的なシステム型社会ができ、「愛」などの新たな概念もうまれた。日本が脱工業化し、その社会が機能しなくなった今、「シェア」という概念が考えられるようになった。その散発的で、捉えがたい「シェア」の諸相を、社会的・思想的な流れの中に位置付けることを本書では試みている。

第1章 「都市化・近代化・市場化」

工業化社会への転換という時代的要請の中で形成された「近代都市」の基本構成と、その設計理念を明らかにするとともに、近代都市が機能不全を起こした結果、「市場化」「産業のソフト化」「縮小社会の到来」「インフラ・建物の高度蓄積」などといった文脈の下で、) 近代都市がポスト近代社会へと再構築されていく。その後の「シェア」という動きの現代的な成り立ちを描く。 →「シェア」の前提を整理する章。

近代都市の根拠 **ー** **新型スラムと二十一世紀の都市の課題ー** **西沢大良**

- 軽工業により発生したスラムや公害といった都市問題からの再生をしたことが近代都市への劇的な役割を果たした。
- 重工業へのシフトにより拠点が都市部から移動したことで、スラム化は一瞬止まったように錯覚するようになった。→それは新たなスラム(旧型スラム・新型スラム)の形態を生んだ。(都心の周縁にスラムを移動させたにすぎず、外部を搾取する社会的な構図は続いたまま)
- よって、均質的で少種多量な近代都市計画のやり方は根本的な解決法にはならなかった。むしろ欠陥を拡大再生産してしまう。 →多種多量の考え方は？
- 都市の変化に続いて建築的な変化が起こる。 →(※1)今の都市の悪化が峠を超えた時に広義の近代建築とは別の建築が生まれる可能性がある。
- 「シェア」という考え方は都市を隣人や周辺との環境を見るため、生態学的であり、多種多様でない世界を捉えられない。 →新たな解決法になるのでは？

近代をリノベートする通時的かつ共時的アプローチ 古澤大輔	野生の思考で都市を記述する 橋本健史	建築はそもそも 揺らぐ所有と情報技術 吉村靖孝
シェアと親和性の高いリノベーションはポテンシャルを見つけ自然治癒力を高めるような方法が重要。例) コーシャハイム千歳烏山住棟改善モデル事業 階段3331Arts Chiyoda 校舎＋校庭の関係性 ルミネ立川おおぞらガーデン 機能変容による動線	「ブリコラージュ(あり合わせの概念)」は手段にしかならずそれによって確立される構造が目的。そこには換喩的な隣接性によって「部分(タグ)」を結びつけ、理解しにくい全体(構造)を明らかにする特性がある。部分に有効性を示す。→部分の集積という意味の「シェア」	インターネット等の普及が近接性の優位性がなくなった社会での現代のシェアの役割とは。ツール(例 NeighborGoods・Airbnb・Nowhere・HouseMaker)が作られることで各々(人)のシェアへの参加を可能にしている。→建築のもっている公共性や反復可能性にはこうしたシステムを受容することができるのでは

都市史のフレーム/パースペクティブから見たシェア論の地平 **青井哲人**

都市史の視点で「社会＝空間」という関係において、現代との連動性があり、様々な変容を生む横のつながり的な「シェア」は「自己再組織化」が起こすことがある。(グローバル的な視点で(但し、日本では、第二～三期にシェアにまつわる問題系(黒沢隆(個室群)、長谷川襄、小野二郎ら)がすでに提示されている。)

第一期 自由放任主義の時代 人も土地も商品となって流動性を増したことを背景に、伝統的シェアに代わる新たなシェアの再建を目指した。第二期 計画主義の時代 政府介入による社会は積極的な大衆化を極端な形で顕在化させ、これに対抗し、自律と連帯(シェア)の回復と再建を目指した。第三期 新自由主義の時代 経済伸長が減退している背景に自由競争と政府不介入の新自由主義が強化され、今のような「新たな公共」を求めるようになった。

第2章 「政治・家族・コミュニケーション」

現代社会に生じている家族の変化や、コミュニケーションの変容の実態を描くとともに、それによって生じた新たな共同体のガバナンス(統治)の在り方と、そこでの政治的参加の形態変化に焦点を当てる。これらはいずれも「住まうこと」や「生活すること」に直接的に関連する事柄である。→「シェア」の現在形を生々しく伝える、本書の核心部分。

地域社会を「シェア」するミクロな政治 **ー** **具体性のための制度設計ー** **國分功一郎**

「シェア」を「同質性」を制度の概念から考えられないだろうか。

- 制度設計によって必要な同質性をつくる。
- ある問題に対して何らかの態度を有するという意味での同質性 →制度はあくまでも問題に対応する形での同質性を形成する。
- 「問題によって形成される同質性」と空間の関係は中心があり、そこから可変的に広がる不均質な空間。→「空間」の範囲によって、制度の範囲も少し変わってくるのでは。そこには調整の必要性がある。

「シェア」という思想は一人一人が一票を持ち集まることで全体に関わるようなこと。民主主義社会の在り方が基礎になっている。→そこには個々の自覚。

建築家も一種のファシリテーターである。 →意見だけではなく、土地や気候や歴史性。様々な要素を考慮しなくてはならない。

建築において… 緩いつながりをどう維持するのかでは。デザイン的な「遊び(＝目的が隠されている(偶然性がある)という点)」

→成し遂げるには分野を越境するような批判が重要になってくる。

個がつながる時代の、家族・社会・建築 猪熊純	まるで、ちいさな世界みたいだ、という気分	《食堂付きアパート》について 仲俊治
「シェア」は、「個(孤)がつながる時代」を乗り越えるためのプラットフォームを作る。「社会縁(全くの他者とのつながり)」の設計では、横の繋がりを作る新しい建築計画が必要。	垂直にあつまるコーポラティブガーデン 中川エリカ	「小さな経済(仕事、趣味、特技を通して他人と関わろうとする営み)」を形にした設計。ハードとソフトの関係が内包する営みやつながりを通して、街からプライベートまでを緩くつないだ。

わが国の「シェア」と参加の前提条件 **消費社会、地方分権、データ駆動型政治はなにをもたらしているのか** **西田亮介**

「シェア」を社会経済的前提で考えてみる。→「シェア」は新しい文化を生み出す結節点になりえるのか。現代の日本は、地方運営形態と自治の方法論が向かうべき先が見当のつかない(経路依存性)「シェアなき社会」と呼べる。また情報化や技術の導入は直ちに社会や政治の変革を引き起こすわけではない。特に日本は国民がそのフレームワークを形成する機会が極めて乏しい。それにより「イメージ政治」に陥っている。→制度設計の個人化を進め、「シェア(くも)可能な社会」が実現するには。

第3章 「働き方・生き方・価値観」

「シェア」という動きが、我々の生き方にどのような転換を迫り、制約をもたらし、あるいは自由を与えるか記述する。

→新しい社会的・空間的枠組みのもとでの人間存在の在り方そのものへの考察を深めることを目的とした章であり、最も未来に向けられた部分。

悪いこともできる建築 **ー** **秘密とモノー** **千葉雅也**

近年のシェアには、様々な主体の参加可能性が担保されていて街に開かれているような全体空間が求められているように見える。しかし「シェア」という問題には開放性を追求したがゆえに多様性が社会の中で多く可視化されたから。=秘密を失っている。同一化のような視点になっている。「シェア」は秘密という問題を「シェア」することこそが重要なのではないか。「秘密性」という暗がりの領域が世界にいくつもあるイメージ(誰も入れない空間)→建築論ではそれに対応するような空間の共有の仕方を考える必要がある。そこでアクセスが容易になった今、オブジェクト指向存在論のようなモノ(建築的にはエレメント)のプライバシーが考えられている。究極の特異性＝自閉症的特異性(こだわり)それでの構成が可能なのでは。多様な意思の共存を可能とする場のイメージこそ、「シェア」が想起させる空間のイメージなのではないか。

ひらかれた形式 Network, Takes Over 連勇太郎	フルサトをつくる 他拠点居住 pha	建築のアイデンティティとアクター・ネットワーク 能作文徳
建築そのものを社会のサブシステムとして生み出す方法があるのでは。能動的に動き回る「軽やかさ」が求められる。「モクチンレシビ」のような部分的な建築提案が広がる様々な関係性に介入できるのでは。	シェアハウスなどの手軽な住居スタイルの出現がいろいろな人が場所をゆっくりと行ったり来たりできるような流動性をうまく維持できるようにすることが大切。(シームレスに繋ぐようなスタイル)	「多面的なモノ」と混交的な結びつきから生まれる多様なアクターの事例を取り上げている。そこから作られるネットワークがあり、短長、強弱、可視・不可視といった性格がある。建築は産業構造の中に組み込まれつつあり、ネットワークが長くなり見えにくくなっている。→外側からの結びつきを含めた可視化が重要。

切断と連続のパラドクス **シェアの両極、あるいは空間からエレメントへ** **門脇耕三**

「シェア」によって形成される共同体には2つの種類がある。

- 共同体の形成を目的とする「シェア」 →共同体の同質性が高い、外部との関係は切断的。
- システムなどを用いた環境可変を施行する「シェア」 →共同体の異質性が高い、外部との関係は連続的。

さらに近代建築以降には抽象的な「空間」という概念が入る。→際立った特徴を付与される(設計者の考え等)それが外部との関係が切断的にしている。→切断を回避する手段を講じる「出会い方」のデザインの方法が必要。また②のような内部の異質性が高い共同体の手掛かりとした領域の在り方を考える。→「エレメント(反一空間)」の要素と「シェア」にはエレメントの単一的な全体性を仮定しないまま共存させようとする非中心性や連続性を持っている。

第4章 「座談」

様々な形で「シェア」を実践する建築家4名による座談を通じて、本書で取り上げた内容を統括し、「シェア」が導くであろう環境の在り方を考えるとともに、環境形成の新しい方法論の構築に至る道筋をつけようとする。

シェア、ネットワーク、エレメントとしての建築 **ー** **価値の不確かさに向かってー** **中川エリカ × 能作文徳 × 橋本健史 × 連勇太郎**

「シェア」というのは制度化されていない価値の不確かな概念だが、多様な意思の共存を可能にする場のイメージこそ建築的な予感があるのではないか。

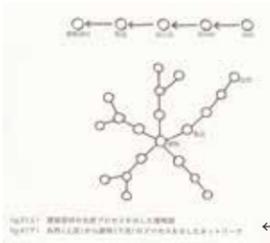
- 「シェア」には、ひとつの領域にひとつのものを対応させなくてはならないということがない。→人々の関係性や自発性の力を取り込む必要。そのときに必要な概念。
- 「シェア」を空間で実現するときタイポロジーだけではなく、「エレメント」という単位で考える必要もある。
- 建築的な「シェア」と「パブリック」という境界をどう考えるか。
- 「シェア」の自発性の連鎖が促すことでよりよい街並みの形成ができるのではないか。

議題

- 近代以降、「空間」という概念が建築に入ったことで「シェア」という他者や外部との接続を容易とする建築がなりたち始めた。もし50年後か100年後、別の新しい建築が誕生するとしたらどのような概念が取って代わり、どのような建築が作られていくだろうか。
- p86において、「House Maker」のように、「シェア」という概念により建築設計の分野にも多くの一般を受け入れるようなシステムを作り出している状況から、これから建築家の存在はどうなっていくだろうか。
- p162 猪熊さんの場合、規模によって建築的操作を変え(下図)、「シェア」を生み出す空間性を変えているがその境界線はどこだろうか。
- p229 日本の社会を「シェア<も>可能な社会」にするにはどのように建築(アーキテクチャ)は介入できるだろうか。
- p285 建築的なネットワークを見えるようにする建築とは可能だろうか。



← 猪熊純の改修例



← アクターネットワーク例